

学校内適応指導教室設置についての実践研究

—不登校支援協力員からのヒアリング調査結果より—

日 高 なぎさ

Practical Study on the Establishment of an Adaptation Classroom in School

—The Results of an Interview Survey of Staff Providing Support
for Students Exhibiting School Refusal—

HIDAKA Nagisa

Abstract

The prevalence of school refusal in the current educational climate is markedly high, posing a serious social problem.

With the support of middle schools, the author has been expanding approaches to the reduction of school refusal using a “school counseling room” to simulate a simple “in-school adaptation classroom”, and has been providing support for students to improve their social skills, by creating opportunities for contact with other school refusal students or their classmates, and by offering psychological counseling, while effectively utilizing human resources, including teachers and staff, to provide support for students exhibiting school refusal.

An interview survey was conducted involving support staff engaged with students exhibiting school refusal at three middle schools where an “in-school adaptation classroom” was established, and the benefits and problems associated with this trial were examined.

As a result, the benefits and problems of this use of an adaptation class in middle schools were clarified. The benefits were: “improvement of facial expression and conversation” and “rising attendance rate”. The problems were: “necessity of support system for staff members engaged with school refusal students”, “following rules and schedules in school”, “provision of study support system” and “human resources”.

平成23年12月6日 原稿受理

大阪産業大学 人間環境学部文化コミュニケーション学科専任講師

Keywords : School refusal, adaptation classroom in school, active group psychotherapy, friendship, bond theory

要約

不登校は近年の学校現場において極めて出現頻度が多く、依然として深刻な社会問題である。

筆者は数年前から中学校の協力を得て家庭から距離の近い学内の「心の教室」を簡易型の「学校内適応指導教室」として位置づけて活動内容を拡大し、教職員や不登校児童支援協力員等の人的資源を有効に利用しながら、不登校生徒間や一般生徒との交流の場を設けてソーシャル・スキルの涵養を図ったり、心理的サポートを行ったりして支援を行っている。

本研究ではこの「学校内適応指導教室」の取り組みを行った3つの中学校で、主に不登校生徒と関わった不登校支援協力員にヒアリングを行い、本試みの利点と問題点について検討した。

その結果、本取り組みの利点としては「表情や会話量の変化」「不登校生徒同士の交流の増加」「出席率の上昇」が、問題点としては「支援者のサポート体制の必要性」「時間枠と学内ルールの遵守」「学習支援の充実」「人的措置」などが明らかになった。

キーワード : 不登校, 学校内適応指導教室, 活動性集団心理療法, 友人関係, ボンド理論

I. はじめに

平成23年度学校基本調査¹⁾によると、平成22年度に不登校で学校を30日以上欠席した児童生徒は小学生が22,463人、中学生が97,255人であり、不登校は依然として深刻な問題である。

不登校児童・生徒のための支援システムとして市町村等に「適応指導教室」が設置されたり、スクール・カウンセラー（以下、SC）が導入されたりしており、一定の効果を上げている。しかし、SCを常設しているアメリカと異なり、我が国における現在のSCの活動は、週1日の勤務に限られており、他の曜日の学内での不登校支援体制が不十分な状態にある。また適応指導教室も、各市に一つもしくは二つ設けられている程度であり、物理的距離が遠い児童・生徒は通うことが困難である。

一般大学生41名を対象に「過去に『学校に行きたくないと思ったことがあるかどうか』また「登校を渋ってもなぜ不登校にならなかったのか」についてヒアリング調査した筆

1) 文部科学省 平成23年度学校基本調査 2012年。

者²⁾の研究では、中学生時代の不登校を抑制要因として「情緒的サポート」が有効とわかり、特に「友人」からの情緒的サポートが有効であったと回答した者が最も多かった。また一度も登校を渋らなかった者5名の回答を検討すると、「友達に会えるから（登校するようになった）」「学校に行かないと友達に会えないから」など5名中5名が「友人との関係」を挙げていた。このことから友人との良好な関係が中学生の不登校に抑制的に働く可能性が示唆された。

そこで、筆者は数年前から学校の協力を得て、学内にある「心の教室」の機能を拡大させ、市内等に設置してある適応指導教室のように遊戯療法的な手法や学習支援などを取り入れた、簡易型の「学校内適応指導教室」の取り組みを行っている。本取り組みでは、教職員や不登校児童支援協力員などの人的資源を有効に利用しながら、不登校生徒同士の友人関係の形成や一般生徒の交流などを通して、不登校生徒のソーシャル・スキルの育成を行っている。

本報では、学校内適応指導教室で主に活動してくれた不登校支援協力員3名のヒアリングを行い、本取り組みの利点と問題点について検討する。

Ⅱ. 方 法

(1) 対象者について

ヒアリングの対象者は、以下3つの中学校において本取り組みに対して主に関わった不登校支援協力員3名である。不登校支援協力員は各市単位で設けられている制度であり、毎年5月頃から派遣され、翌年の3月末まで雇用される非常勤職員である。週4～5日、終日、学校で勤務し、基本的には不登校生徒の家庭訪問や別室対応などを行うが、学校によって支援方針も異なるため活動内容は若干異なる場合がある。年齢や性別は問わず、特に心理学や福祉、教育等に関する資格も必要ではない。そのために各市単位で研修は受けるものの、不登校支援協力員の不登校生への支援能力や関わり方には個人差があるという意見もある。

今回は以下の3名を対象にヒアリングを行った。

【X中学校の不登校支援者 A氏】

A氏は4年制教育大学を卒業した20代前半の女性である。彼女自身も以前、非常勤講師として数年間、私立学校で勤務していたが、教員の業務に馴染めず退職。その後、日中の

2) 日高なぎさ 「健常者を対象にした不登校の研究(第2報)―不登校にならなかった要因について―」『関西大学心理相談室紀要』第4号 2003年 75-82ページ。

時間が空いていることから、生徒指導教諭の友人が不登校支援協力員の業務を紹介し、勤務することになった。X中学校で2年勤務した。

【Y中学校の不登校支援者 B氏】

B氏は短期大学を卒業した20代前半の女性である。中学校教員を目指そうと思っていたが、担当科目の教員免許が取得できていないため、Y中学校に勤務する教員から不登校支援協力員の業務を紹介され、勤務することになった。Y中学校では3年間勤務した。

【Z中学校の不登校支援者 C氏】

C氏は仕事を早期退職された50代の男性である。地元では保護司をしたり野球のクラブチームの監督をしている。Z中学校での勤務の前には小学校で不登校支援や学習支援を行う非常勤として勤務し、Z中学校では2年間勤務している。

(2) ヒアリング方法について

ヒアリングは約30～40分を目安に、個別に実施した。ヒアリング内容は「今まで、学校内の別室（心の教室）において、遊戯療法などを用いる一般の適応指導教室のような自由度の高い活動を適応する実践を行ってきました。本取り組みに不登校支援協力員として実際に携わってみて、この試みの①良かったと思う点と、②改善するべきだと思う点について教えて下さい」と依頼した。

上記の通り、ヒアリング形式は半構造化面接とし、記録方法は筆者が逐語的に記録した（内容が煩雑になることから本論文では要点のみを掲載する）。

(3) 学校内適応指導教室について

本取り組みは先述の通り、学校内にある「心の教室」の機能を拡大させ、市内等に設置されている適応指導教室のように遊戯療法的な手法や学習支援などを取り入れ、市内の適応指導教室に通うことが物理的に困難な不登校生徒に対して学内で援助を行うというものである。

筆者は週1日、SCとして勤務し、「心の教室」では主に生徒指導教諭、他の教職員及び不登校支援協力員（週4日勤務）が生徒と関わった。3校とも環境的に大きく異なるため、援助方法も若干異なるが、以下の点は基本的に共通している。

① 信頼関係の形成

高橋・北村³⁾が述べているように、治療者と子どもとの間の「ラポールこそが心理療法の中核」である。学校内適応指導教室においてもこの考えに従い、SCや不登校支援協力員、教職員は不登校生徒に対して家庭訪問を行ったり、電話で連絡をとったりして信頼関係の形成を心がけ、彼らが「学校の先生達に見捨てられた」と感じないように援助した。

また「心の教室」へ登校できるようになってからも、彼らの話や悩み聞いたり、適宜カウンセリングを行うなど受容的に関わり、彼らとの心のつながり（ラポール）の形成に努めた。

このようにSCや不登校支援協力員、教職員とラポールが形成されれば、彼らの対人不信感の軽減にも役立ち、またそのラポールがいずれは不登校生徒同士、友人など他の親しい人物へ般化し、人間関係の拡大に有効と考えられる。

② 「友達」という横のつながりの形成

上述の通り、過去の不登校の研究では、友人関係が不登校の大きな要因と報告されており、良好な友人関係が形成できれば不登校は軽減・改善するものと考えられる。

そこで、本取り組みでは不登校生徒同士で行う共同作業やゲームなどを通して、良好な人間関係を築かせ、友達という「横のつながり」を作れるように集団心理療法の理論を導入した。

一般的な学内の「心の教室」の運営方法は通常、クライアント（生徒・保護者など）とカウンセラーの1対1の個別カウンセリング、もしくは保護者同席のカウンセリングが中心であるが、この点が本取り組みの特徴の一つである。

心身の成長が著しい思春期の中学生を対象とし、友人関係の形成を中心に行っていることから、遊具を使用した様々な活動を取り入れたスラヴソンの活動性集団心理療法の理



図1 遊具の例

3) 高橋雅春・北村依子 『幼児の心理療法』 新曜社 1990年 75ページ。

論⁴⁾を取り入れた。思春期の生徒の遊戯療法には適度な運動がカタルシス効果があることから、遊具の選定には卓球やバドミントンなど身体運動を行う遊具や⁵⁾、集団でのコミュニケーションを促進し、生徒の社会化を促すような集団で行えるゲーム等の遊具を揃えた(図1)。

さらにまた七夕祭りやクリスマス会など、不登校生徒が準備などから着手し、参加できるイベント等の企画も行った。

③ 学習支援

不登校生徒の中には高校受験を目前に迎えて、学習の遅れを気にし始め、進路問題で情緒が不安定になる者が多い。そこで不登校支援協力員や教員に協力を依頼し、授業時間の合間に教材を準備してもらい、学習支援なども行った。

一般的な適応教室では「学習=学校」というイメージを持たせて、不登校生徒に適応指導教室への拒否感を抱かせることから、学習補助を実施することは少ないが、本取り組みはあくまでも勉強する場である「学校」という施設の敷地内での取り組みであること、また上記のように成績を気にし始める生徒が多く出てくることから、国語、英語、数学など一般教養レベルの学習支援を行うようにしている。

④ 一般生徒とのふれあい

学内の「心の教室」では不登校生徒の支援を行うだけでなく、学内の一般生徒に対する心理的サポートやストレスの軽減も重要な役割となっている。そこで昼休みは一般開放し、一般生徒を「心の教室」の一つの部屋に、不登校生徒は「心の教室」のもう一つの部屋に移動させ対応している。また不登校生徒の状況を見て、一般生徒と交流できるような状態であれば、会話をさせたりゲームをさせたり交流する機会を設定している。

このようなふれあいの場を設定している理由は、不登校生徒の対人不信感の軽減や社会化に役立つだけでなく、一般生徒の「思いやり」の気持ちを育んだり、「不登校=さぼり」というネガティブなレッテルを軽減したりすることにも有効だからである。

またディアボロショー(中国コマの披露)や共同コラージュ(貼り絵)の文化祭での披露、幼稚園児との行事(餅つきや七夕祭り)へのボランティア参加など、教職員が彼らにも実施できると考えた一般生徒が参加する取り組みや学外の人と交流する機会への

4) S. R. スラヴソン 小川太郎・山根清道(訳)『集団心理療法入門』誠信書房 1956年 180-189ページ。

5) H. ジノット 中村悦子訳『児童集団心理療法』新書館 1965年 94-99ページ。

参加も不登校生徒の希望を聞きつつ促し、人間関係での自信をつけるように心がけている。

Ⅲ. 結果（各中学校の不登校支援者のヒアリング調査）

【X中学校について】

(1) X中学校の不登校支援体制について

Xの中学校は関西地方の某市にある公立の中学校である。下町情緒を残した落ち着いた地域で、比較的教育熱心な家庭が多い。しかし、地域の一角には生活水準の低い家庭も混在している。X中学校での学校内適応指導教室は「心の教室」と命名し、職員室と同じ並びにあり、保健室の横に位置している。

不登校支援体制としては、昼休みと放課後を一般開放の時間とし、その他は不登校生徒のみが利用していた。基本的には、不登校支援協力員が中心に関わるが、教職員に協力を依頼し、休み時間などには担当の不登校生の面会に来てもらうようにしていた。また手の空いた教員が顔を出して学習の補助等を行ってくれた。

また、生徒指導教諭および教職員が検討し、不登校生徒も参加可能と考えられるボランティア（近隣の幼稚園の七夕祭りや餅つきの手伝いなど）には、積極的に参加させた。

(2) X中学校の不登校支援者（A氏）とのヒアリング

① X中学校の学校内適応指導教室の「利点」

- ・ 午前中、集中力がある時間帯は学習させ、昼からは遊びやおしゃべりなどの時間にあてることで、リフレッシュできたり、生徒達同士の交流が生まれやすい。
- ・ 卓球やストレッチなど体を動かすことで、一緒に楽しめることができる。
- ・ またジェンガなどを利用して生徒達が新たな遊び方を協力して考え出し、「次からは10段まで皆で頑張って高くまで積んで行こう！」と一緒に目標を設定し、それに向けて頑張っていたのがよかった。
- ・ 小学校にも援助しに行っていたので、自分自身が負担になったとか、ずっと「心の教室」にいてしんどかったということはない。
- ・ 一般開放は不登校生徒の状態に応じて注意深く考える必要があるが、放課後や昼休みに一般の生徒が来ることで、彼らのストレス軽減には役立ったと思う。

② X中学校の学校内適応指導教室の「問題点」

- ・ 学習補助が難しかった。不登校生徒の学年もまちまちであり、学年や科目に応じたプリントを用意してもらおうと、担任や学年主任に依頼するものの、単発的であたりしてなかなか継続的に支援してもらえない。
- ・ 担任によって顔を出してくれる教員と顔を出してくれない教員がいるので、見捨てられ感を持つ生徒も出てくる。
- ・ つい遊ぶ時間が長くなり、時間のメリハリがつきにくい。掃除などの生活習慣もなかなか身につけにくい。
- ・ 一般生徒への開放の時間の計画は来室している生徒の状況に応じて検討する必要があると思う。
- ・ 教職員への理解が難しかった。年齢的に若いので、自分が言えないこともあり、またなかなか理解してもらえず困ったことも多かった。

【Y中学校について】

(1) Y中学校の不登校支援体制について

Y中学校も関西地方の某市にある公立の中学校である。X中学校よりも地域的には支援が厳しい地域ではあるが、この市内では富裕層も比較的多い地域である。筆者がSCとして赴任した頃は、非行少年のグループが存在したが、リーダーは比較的教職員と仲が良く、敵対するほど荒れた状況ではない。

Y中学校は市内の諸事情から、早期退職した教職員や非常勤講師など補助教員の人数が非常に多く、かなり充実した支援を行うことができた。

初年度は「学校内適応指導教室」の「心の教室」だけであったが、2年目からは学習補助の必要性をSCが提案し、「step up room」という学習支援の教室も確保でき、それぞれの教室を担当する補助教員を決め、2つの教室をうまく運用しながら援助を行った。

両教室の違いは、「心の教室」が不登校生徒を対象に、遊戯療法や作業療法、集団心理療法などを取り入れた試みと簡単な学習補助を行うのに対して、「step up room」は主に一般学級で学力が低い生徒が保護者の了解を得て、苦手な教科だけ通う教室であり、学習補助のみを行う。

しかし「心の教室」に通う不登校生徒の中にはかなり低学力の生徒もおり、簡単な学習補助のみでは受験に対応できないことから、本人が希望し保護者の了解が得られれば「心の教室」に通いながら特定科目だけ「step up room」において学習支援を行えるようにしている。

「心の教室」は職員室から離れた建屋にあったが、不登校生徒が入室しやすく、かつ教職員も顔を出しやすいように、「心の教室」の場所だけは職員室と同じ並びの教室を空けてもらい、その教室及び図書室を利用した。

(2) Y中学校の不登校支援者（B氏）とのヒアリング

① Y中学校の学校内適応指導教室の「利点」

- ・喋らなかつたり、表情が暗かった子が「遊び」を通して、笑ったり、会話が增えたりしたのがよかった。遊びがコミュニケーション手段になった。
- ・「心の教室」を楽しみにして、登校できるようになった子が增えてよかった。
- ・自分で時間割を作らせたのは、時間のメリハリができてよかった。

② Y中学校の学校内適応指導教室の「問題点」

- ・慣れてくると、遊びや好きなことばかりになってしまうので、メリハリをつけたり線引きするラインが難しかった。
- ・理解のある教員と理解のない教員とがいて、「心の教室の生徒は遊びや手芸など自分の好きなことしかやっていない。単なる甘えだ」ととらえる教員がいて、教員間の温度差が困った。
- ・囑託の補助教員が多かったから実現できたのだと思う。
- ・担任によって生徒への関わり方に温度差があるので、生徒がかわいそう。
- ・学習の補助プリントの準備やその他の連絡プリントなどを不登校支援協力員から担任に依頼するものの、担任も多忙でありなかなか準備してもらえない。副担任などをもっと有効に活用するとよいのでは？非常勤である支援者からはなかなかいいにくい。あるいは管理職や学年主任から言ってもらいたい。
- ・保護者の理解を得ることが難しい。保護者によって「遊ぶ」ことが○の人もいれば、×の人もいる。

【Z中学校について】

(1) Z中学校の不登校支援体制について

Z中学校も関西地方の某市の公立中学校である。Y中学校の横の校区に存在し、Y中学校よりもさらに経済的に厳しい家庭が多い地域であり、生活保護を受けている家庭が多い。完全不登校の生徒も多く、家庭訪問をしても全く会えず、保護者ともなかなか連絡が取れず生存確認すらおぼつかない事例も多い。

Z中学校では、補助教員も少ないことから「心の教室」のみの支援であり、「心の教室」の場所も職員室から離れた建屋にある。

(2) Z中学校の不登校支援者（C氏）とのヒアリング

① Z中学校の学校内適応指導教室の「利点」

- ・先生と生徒が敵対してはいけなくて、先生と異なる面を示さなくてはいけなくて心がけている。信頼できる関係を作るようにいつも心がけている。
- ・遊具をツールとして利用することで、話せることが出てくる。子どもたちも遊びを取り入れることで、口を開く、胸（心）を開くようになり、家庭のことなど色々話してくれるようになったと思う。
- ・新聞などを通して漢字の練習などをさせて、できるだけ学習の機会を作っている。
- ・教室復帰できた子がいてよかったと思う。

② Z中学校の学校内適応指導教室の「問題点」

- ・ルール（整理整頓、挨拶）が、他のクラスの子と交流することでルーズになってしまう。ケジメやルールを守らせることも必要。
- ・最低1日は（不登校生徒に）来てほしいと思う。
- ・学習の進捗度合が異なるので、1人では対応が難しい。担任がプリントを用意してくれるとありがたい。学習面は教員に依頼したい。
- ・「心の教室」に向きそうな心に悩みを抱えている子、潜在化している子どもがもっと「心の教室」に来れるといいかな？と思う。
- ・また先生方にももっと「心の教室」を利用して欲しいと思う。

IV. 考 察

以上の不登校支援協力員の意見から、本取り組みの利点と問題点について考察する。

【利点】

① 表情や会話量の変化

A氏、B氏、C氏3名とも、遊戯療法的な要素を取り入れた本取り組みを通して、今まで感情を表出したり言葉を発することが少なかった不登校生徒が、喋ったり笑うようになったり、遊具を通して心を開いてくれるようになったという感情面での変化を報告して

いる。

不登校生徒や小児心身症に罹患する子どもの多くは、自分の欲求不満や否定的な感情を適切に表現することが困難な者が多く、心因性発熱や心因性腹痛、心因性頭痛などの身体症状として表現している場合が多い。

例えば、不登校生徒によく認められる症状に心因性発熱がある。心因性発熱の小児患者に文章完成法を実施した齊藤ら^{6) 7)}によると、言語的表現力に乏しく情動を適切に言語化できにくい者が20例中11例に認められたと報告されており、また井原⁸⁾も心因性発熱の小児に欲求不満を自由に表現できない者が多いとしている。また中村⁹⁾は小児心身症の子ども達の治療において、欲求や感情の言語化を促す心理技法が有効と報告している。

このように不登校生徒の治療に対して、医療機関や特別な治療機関に限らず、学校という教育現場においても、箱庭療法や遊戯療法的手法を用いて、彼らの欲求や感情の言語化を促し、彼らの感情を適切に浄化させることは有効と考えられる。

ただ、本取り組みの場合、学内ということもあり、B氏の意見のように遊具を用いた本取り組みに対して「単に不登校生徒達が遊んでさぼっているだけだ」と批判的に考え、本取り組みを十分に理解してくれる教職員ばかりではない。そのため、一般の治療施設と比べると遊具の選定や遊具を用いる時間などについては、「枠」「制限」を設けて、制限しつつ取り組むこと、また教職員に遊具を用いる意義や遊戯療法に対して、十分に説明を行い、理解を促すことが重要と考えられる。

② 不登校生徒同士の交流の増加

A氏とC氏のヒアリングでは、本取り組みを通して生徒同士の交流が増え、友人関係の形成に役立ったことがわかる。A氏の担当するX中学校では不登校生徒達自身が創造性を発揮し、遊具であるジェンガを用いて通常とは異なる遊び方を考案し、毎回、目標設定をして皆で協力するようになったり、休日に一緒に遊びに行く約束をするなど、不登校生徒同士の繋がりができあがり、それが学外での交流にまで発展していた。

さらにA氏、C氏の担当校では、不登校生徒が一般生徒との交流を通して、彼らに原学

6) 齊藤久子・今橋寿代・和田義郎・石川道子 「過去15年間の心身症の動向（1970～1984）」『小児の精神と神経』第26号 1986年 275-281ページ。

7) 齊藤久子・山本高晴・和田義郎・石川道子 「小児心身症の臨床的研究Ⅰ－17年間における心身症の検討」『日本小児科学会雑誌』第93号 1989年 1348-1352ページ。

8) 井原成男 「心因性発熱」『小児内科』第23号 1991年 296-299ページ。

9) 中村仁志・齊藤万比古 「心因性発熱症男児の遊戯療法過程」『千葉県立衛生短期大学紀要』第8号 1989年 31-38ページ。

級への登校を促されて教室復帰できるようになるという変化も生まれており、このような同年齢集団での人間関係形成は友人関係における自信をつける際に有効であり、彼らの教室復帰や学校復帰にも役立つと考えられる。

③ 出席率の上昇

本取り組みでの「心の教室」は、遊具なども用いた遊びを取り入れていることから、明るく楽しい雰囲気であり、「カウンセリングを受ける」という緊張感を与えることが少ない。そのため不登校生徒の「心の教室」へ出席率が上昇しやすく、「心の教室」でのふれあいを通して教室復帰できる生徒も多い。

この要因は上述した通り、不登校生徒同士の結びつきによるものだけでなく、彼らに関わるSCや教員、不登校支援協力員との信頼関係も大きく影響していると考えられる。

森田は犯罪原因論であるハーシィ (T. Hirschi) のボンド理論 (social bond theory)¹⁰⁾ を不登校現象に応用し、“生徒と学校社会との社会的絆が強ければ、子ども達は学校生活に強く引き付けられ登校行動は確保されることになる。不登校行動は、これを裏返せば、社会的絆の弱まりによって発生するというロジックによって説明されることになる”¹¹⁾ と述べて、学校の誘因と不登校生徒との結びつきのを強めることが不登校の予防に役立つと述べている。

さらに森田¹²⁾ は不登校の原因としては、友人や教員など“学校内の人間関係が大きな比重を占め、不登校行動を強く規定している”と報告している。同様に筆者の研究¹³⁾ でも、中学生時代に登校を渋る原因として「人間関係」が最も多く回答されている。

本研究の試みでは、学校内適応指導教室において不登校生徒達が不登校支援協力員や教員、SCに見守られながら、学習やゲームなど様々な集団活動を通して友人関係を形成し、ハーシィの提唱する人と人との繋がりである「アタッチメント」要因¹⁰⁾ (両親や教師、友達など子どもにとって大切な人に対して抱く愛着の念によって形成される対人関係上の繋がり)、森田の述べる「対人関係によるボンド」¹¹⁾ (ハーシィの「アタッチメント」と同様に重要な人物との対人関係上の繋がり)を形成することができ、対人不信感が軽減され、「不登校生徒の交流の増加」「教室復帰」や「出席率の上昇」という改善に繋がったものと考

10) T. ハーシィ 森田洋司・清水新二 (監訳) 『非行の原因：家庭・学校・社会へのつながりを探る』 文化書房博文社 1995年 29-48ページ。

11) 森田洋司 『「不登校」現象の社会学』 学文社 2005年 238-248ページ。

12) 同書 243ページ。

13) 日高なぎさ 「健常者を対象にした不登校の研究 (第1報) —登校を渋った経験, 時期および原因について—」 『関西大学心理相談室紀要』 第3号 2002年 61-70ページ。

えられる。

【問題点】

① 支援者のサポート体制の必要性

SCや不登校支援協力員は非常勤職員であること、また多くの時間を「心の教室」で不登校生徒と過ごすことから、往々にして教職員と心理的距離が生じやすい。この問題を改善するためには、SCや不登校支援協力員が空き時間を利用して、できるだけ頻繁に職員室に足を運び、生徒の登校状況や状態等について報告するように心がけることが必要であろう。

また3校中2校の不登校支援協力員は他の教職員よりも年齢の若い20代前半であった。不登校支援協力員の年齢が若いことは、生徒との関係を形成する上では心理的な距離が近くなり有利に働くと考えられるが、A氏やB氏の意見にもあるように対教職員との関係においては、協力を依頼する際に気を遣って言い出せなかったり、自分達の活動を十分に理解してもらえないことがあり、自分自身で悩みを抱え込むことがある。

不登校支援協力員の年齢や性格、支援経験年数に応じて、SCが彼らのヒアリングやスーパーヴァイズを行い、教職員との橋渡しをしたり彼らの心理的なケアを行い、彼らの学内での心理的な孤立化を防ぐことが重要であろう。

② 教職員全員へのさらなる周知と理解の促進

A氏、B氏の意見にもある通り、教職員によって「心の教室」への関わり方には大きな差がある。顔を頻繁に出してくれたり、不登校生徒へ頻繁にプリントを届けてくれたりする熱心な教職員もいれば、不登校生徒の対応を支援協力員やSCに丸投げし、全く関わらない教職員もいる。同じ部屋で複数の不登校生徒の対応していることから、生徒によっては自分の担任が顔を出してくれないことに対して「自分は学校の先生に見捨てられているんだ」と考える生徒もいる。

本取り組みに限らず、教職員の負担にならない程度に不登校生徒にこまめに連絡をとったり、話す機会を作ることは不登校生徒と教職員との信頼関係を形成する上で重要である。この問題を改善するためにも、管理職から教職員全員に対して不登校支援の方針や取り組みの必要性などについて説明し、協力を得られるように理解を促すことが必要であろう。

またB氏の意見のように保護者の中にも子どもが「心の教室」へ登校し始めると「学校では必ず勉強させて、学習の遅れを取り戻させて欲しい」と要求する者も多い。このような場合も、教職員が不登校支援の在り方や遊戯療法的取り組みの意義などについて十分に

理解し、保護者に説明できれば保護者の理解も促しやすくなるものと考えられる。

③ 時間枠と学内のルールの遵守

A氏、B氏、C氏に共通する意見として「時間的なメリハリをつけることが難しかった」との意見があった。

一般の適応指導教室は学内にないため、様々な遊具を用いて活動することができ、活動や時間に自由度を持たせることができるが、本取り組みの場合、あくまでも「学内」での適応指導教室であることから、学内にいるということに留意し、学校の授業時間や休み時間など「時間枠」を守らせたり、掃除を必ずさせるなど学校内のルールや枠組みをある程度守るような配慮が必要であろう。学内のルールを守らせることで、一般生徒から彼らが「不登校＝さぼり」というようなレッテルを貼られることを防ぐことにもなると思われる。

また時間枠をある程度作らせることは、時間にメリハリを作ることもできる。不登校生徒の中には、昼夜逆転して不規則な生活を送っている者が多く、このような時間枠を守らせることで、彼らの生活リズムや時間感覚が養われ、また教室復帰をする際の心構えができて役立つと考えられる。遊びを取り入れる時間、気分転換を行う時間、学習の時間を明確に設定したり、生徒達自身に「今日一日の自分の時間割」などを作成させ、時間にメリハリをつけて関わる必要があるであろう。

④ 学習支援の充実

A氏のように不登校支援協力員の全員が教員免許を持っているわけではなく、また中学生になると各科目の専門性も高くなり始めてくる。各不登校生徒の学習レベルのばらつきもかなり大きく、またB氏の勤務したY中学校のように学習支援専門の教室を設けることは、人的措置が不十分な学校では非常に困難である。そのために学習支援については、不登校支援協力員のみには依頼するのは負担が大きすぎる。

そこで担任を通して担当生徒の学習用プリントや課題を用意してもらうように何度か依頼したが、担任も多忙なことからプリントや課題の準備がなかなか進まず、不登校支援協力員が自ら知恵を絞って課題を考え出したり、協力的な教職員に依頼して担当科目のプリントや課題を準備してもらわなくてはならない状況が多かった。

この問題を解決するためにも、先述の「教職員全員への理解の促進」でも述べた通り、管理職から各学年の教員に対して、不登校生徒に配布すべきプリントやドリルなどを準備するように指示を出してもらい、担任や副担任の方で準備してもらうことが重要であろう。各学年ごとに「課題プリントBOX」などを準備してもらい、そこから不登校支援協

力員が学習課題を持っていくのもよい方法と考えられる。

⑤ 一般開放の問題

A氏の意見にもあるように、不登校生徒の状況をもちろん考慮してからの判断になるが、上記の通り一般の生徒にも教室を開放することは、一般生徒のストレスの軽減、不登校の未然防止にも役立ち、さらには彼らの「思いやり」を育てることに役立つ。また不登校生徒にとっても、人間関係の拡大に有効と考えられる。

しかし、全く他人と会話できないほど重篤な状態の不登校生徒にとっては、元気のある一般生徒は脅威的な存在と考えられることから、一般開放の時間を決め、また不登校生徒の状態や時期を十分に考慮した上で交流させることがよいと考えられる。

⑥ 人的措置

不登校生徒に主に関わる不登校支援協力員の予算措置は年々厳しくなっており、また新学期が開始した後でも毎年、予算措置がつくか不明な場合が多く、支援開始が遅れたり、支援者自身が自分の採用について不安を抱くことが多い。

学校現場では年々、難しい問題を抱えた生徒が増えており、担任や他の教職員だけでは対応しきれない状態になっている。そのために不登校支援協力員や外部人材などについての人的支援や予算措置などを積極的に講じ、さらに支援しやすい体制作りを検討することが必要であろう。欧米のようにSCを常駐させるということも、今後視野に入れておく必要があるかもしれない。

【今後の課題】

上述の通り、本取り組みでは一定の効果は得られているものの、「教職員へのさらなる周知と理解の促進」や「学習支援の充実」、「人的措置」などまだまだ多くの問題がある。

また、筆者が関わっていて最近よく感じることとしては、家庭訪問をしても会えない生徒が年々増加しており、特にこの傾向は家庭が経済的に厳しい生徒に多い印象を受ける。このような不登校生徒の場合、保護者自身も何らかの精神疾患を抱えていたり、昼夜逆転した生活を送っている場合が多く、朝、決まった時間に本人を起こして登校促してもらうという協力も得られないため、生徒の昼夜逆転も改善せず、「心の教室」への出席率もなかなか上昇しない。さらにこのような家庭の場合、電気メーターが動いているかどうかや、近所の民生委員、もしくは行政の職員の数少ない情報を通して生存確認するしかできない場合が多く、虐待やドメスティック・バイオレンスなど不登校以外の重篤な問題の早期発

見や早期援助も不可能である。

このような家庭には、適宜、行政からソーシャル・ワーカーやヘルパーなどを定期的に家庭に派遣して清掃指導や生活指導などを行い、不登校生徒が安全かつ衛生的に家庭で過ごせる環境を整えてもらうことが必要と考えられる。少子高齢化社会の影響から児童・生徒にかけられる教育予算は年々厳しくなっているが、今後の我が国の未来のためにもさらなる人的措置や外部の支援機関との連携が必要であろう。

謝 辞

ご協力頂きました3つの中学校の先生方、不登校支援協力員の方に、この場をお借りして心より深謝いたします。

V. 引用文献

- 1) 井原成男 「心因性発熱」『小児内科』第23号 1991年。
- 2) 齊藤久子・今橋寿代・和田義郎・石川道子 「過去15年間の心身症の動向（1970～1984）」『小児の精神と神経』第26号 1986年。
- 3) 齊藤久子・山本嵩晴・和田義郎・石川道子 「小児心身症の臨床的研究 I - 17年間における心身症の検討」『日本小児科学会雑誌』第93号 1989年。
- 4) Ginott, H. Group psychotherapy with children. New York: McGraw-Hill, 1961 (H.ジノット 中村悦子訳 『児童集団心理療法』新書館 1965年。)
- 5) Slavson, S. R. An introduction to group therapy. New York: The Commonwealth Fund and Harvard University Press, 1943 (S. R. スラヴソン 小川太郎・山根清道(訳) 『集団心理療法入門』誠信書房 1956年。)
- 6) 高橋雅春・北村依子 『幼児の心理療法』新曜社 1990年。
- 7) 中村仁志・齊藤万比古 「心因性発熱症男児の遊戯療法過程」『千葉県立衛生短期大学紀要』第8号 1989年。
- 8) Hirschi, T. Causes of Delinquency, University of California Press, 1969 (T. ハーシィ 森田洋司・清水新二(監訳) 『非行の原因：家庭・学校・社会へのつながりを求めて』文化書房博文社 1995年。)
- 9) 日高なぎさ 「健常者を対象にした不登校の研究（第1報）—登校を渋った経験、時期および原因について—」『関西大学心理相談室紀要』第3号 2002年。
- 10) 日高なぎさ 「健常者を対象にした不登校の研究（第2報）—不登校にならなかった要因に

学校内適応指導教室設置についての実践研究（日高なぎさ）

ついて一」『関西大学心理相談室紀要』 第4号 2003年。

- 11) 森田洋司 『「不登校」現象の社会学』 学文社 2005年。
- 12) 文部科学省 平成23年度学校基本調査 2012年。

